



※フェラ音、喘ぎ声・吐息は文字化されていません。

### プロローグ

台所で洗い物をしていると、息子が後ろからしがみ付いてくる。またセックスをしたがって来た。息子は極度の性依存症で、のべつ幕無しに体を求めて来る。きっかけは、夫と離婚し10年が経っていた頃だった。

私が男を連れ込んで、セックスをしていた所を覗かれた。息子は、別れたとはいえ、父親以外に男を求める母親に幻滅し、以来、口を聞いてくれなくなった。思春期を過ぎれば許してくれるだろうと高を括っていたら、不貞を働いた母親への当てつけだろうか、それからは隠す事も無く、リビングでAVを見ながらオナニーを試みたり、精子の付いたティッシュを放置したりしだした。

そのうち、私のパンティを洗濯籠から持ち出し、匂いを嗅ぎながら陰茎を擦り、またそれを陰部に巻き付け、自慰に耽るようになる。

そうになると、私自身に手を付けるのは時間の問題。私を母親とはみなさず、精処理の道具として利用するようになった。時間と場所を選ばず、セックスしようとする。後ろからしがみ付き、無理やりチンポを差し込んでくる。抵抗しても所詮女。それでも、力づくの行為はいくら何でも、自尊心が許さず、しぶしぶではあるがセックスに応じる事にした。その方が、大人しくなるし、私自身、心のどこかに、贖罪の気持ちもあったのだと思う。

息子との約束は、一日一回だけの射精。セックスではなく手コキが基本だ。

とにかく精子を出したらお終い。

息子は返事をしなかったが、私が一方的に宣言したルールには従っていた。

抵抗されるのを疎ましく思っていたのだろう。手っ取り早く射精に導いてくれる手のサービスに、最初は納得して従っていたが、今ではなし崩し。

一方的にセックスをするようになった。

欲情の都度、私にしがみ付いて来る。私は、最低限の防御としてゴムを被せる。常にコンドームを携帯し、どんなに乱暴をされても必ずチンポに被せて、生ハメ、中出しの鬼畜の所業だけは防いでいた。息子は、そのやり取りに激昂し暴力を振るう事さえあったが、コンドームをしていれば、比較的スムーズにセックスに应じる事を学習したのか、今では自分でコンドームを装着して、チンポを差し込む様になった。タガが外れるとはこの事か。コンドームさえしていれば、母子でセックスだなんて、私達にとってタブーなんて、もうどうでも良くなっていた。

## 台所

台所仕事をしていると、後ろからしがみ付いて来た。いつものようにバックから私を犯す気だ。

またムラムラしちゃったの？ あん、抱き付いちゃダメだって！

ヤメて！ ヤメてったら！ 今、忙しいの。後で相手してあげるから、我慢しなさい。

ダメ！ チンポを出しちゃダメ。ダメって言ってるでしょ！

あと！ 後にしてってたら！

何を言っても無駄。息子は意に返さず、強引にそのいきり立ったチンポをスカートを捲られて露わになった尻に擦りつけて来る。熱い、チンポが勃起して凄いい熱を持っている。あー熱い、イサオのチンポ、熱い。

ひとしきり、肉棒を擦りつけた息子は、唾をペッと吐き出し、チンポに擦り付けると私の乾いたマンコに挿入して来た。

幾らコンドームをしていても、濡れていないマンコには痛い、潤っても居ないマンコに唾を塗った位でのチンポでは痛過ぎる。

静かな台所では、蛇口から流れる水の音と荒い二人の吐息だけが響くだけ。

無言で息子が腰を動かし、それを歯を食いしばり耐える私。

もう、歓喜の喘ぎ声を出さなくなっていて、どれくらい経つだろうか。まだ夫が居た時代、あんなに大好きだったセックスも今では苦痛以外の何物でもない。

早く終われ、早く終われと願っているうちに、私のマンコは快感を感じなくなっ

たし、濡れもしない。

そんなダッチワイフのような母親のマンコでも、肉の柔らかさだけは堪らないのか、息子は何度も何度も激しく腰を打ち付けピストンを繰り返す。

ピストンが早くなって来た。チンポ、チンポがビクビクして来た。

ひとしきり、私のマンコで擦り上げ、あげく、ウッと呻くと大量の精子を私のマンコの中でコンドーム越しに放出するのであった。

## 夜のノルマ

なし崩しのセックスがあるものの、一日一回の精子ノルマは毎晩、寝る前に行っている。お互いがパジャマ姿になったら、それが合図だ。

私は、ローションと濡れタオルを持って寝室へと入る。息子は当たり前の様に下半身裸になって寝そべっている。私は慣れた手つきでローションを息子のチンポに塗りたいくと乱暴にシゴき始めた。そう、就寝前の手コキだ。

こうして寝る前に精子をヌイておかないと、真夜中でも興奮した息子は私に申し掛かって来る。

ニートの息子と違って、私には仕事がある。大切な睡眠を奪われては堪ったものではない。毎晩の手コキ射精は、襲われない為の自衛手段なのだ。

ねえ、まだイカないの？早くイッてよ。

ほらほら、気持ちいいでしょ？チンポシゴいてるわよ。ほらほら、チンポシゴいてる。気持ちいいでしょ？お母さんの手、気持ちいいでしょ？

息子は何の反応も示さず上を向いたままだが、さすがに自分もイキたくなったのか、私の頭を掴むとチンポの先へと近づけさせた。

あっ、嫌！嫌よ！舐めない！舐めないったら！嫌！フェラはしないわよ。ヤメなさい。ヤメなさいったら！

息子は、手だけでは我慢出来ず、口のサービスも強要して来る。

嫌！ヤメて！舐めるの嫌、嫌だったら、あうっ、ウグッ、頭掴まないで！痛い、痛いたら。ウグッ、ダメ、ハアハア、ウグッ。

私の頭を掴んで上下に揺らす息子。より強い刺激を求めて、まるでマンコに挿入しているかのようにチンポを刺激している。

くっ、苦しいったら、ハアハア、ハアハア、そんなに乱暴にしないで！ハアハア、ハアハア、もう、口でしたらスグ出せるの？ホントにすぐ出すのね。スグ出すんだったら、フェラするわ。判ったって！してあげるから、スグに出してよ。

ん？もう、頭掴まないでって言うてるでしょ！うっ、出した。精子が出た。  
ドクドクと生暖かい液体が口の中に溜まる。あー出してる出してる。  
あー出してる出してる。こんなに出すなんて異常だわ。  
もういいでしょ？ほら、さっさとパンツ履いて寝なさい。  
精子の味が口に残ってる。毎日出している筈なのに、濃い精液だわ。

### 息子のオナニー

あら？また無くなってる・・・昨日脱いだパンティが脱衣かごから消えている。  
もう、あの子ったら。私は一直線に息子の部屋に向かうとドアを開けた。  
もう、驚く事は無い息子のあられもない姿がそこにある。  
私のパンティを被り、いきり立ったチンポを無我夢中でシゴいている。  
病気だ。あれだけ私の体を使って精子を放出しておきながら、まだ足りないのか。  
息子はオナニー中毒だった。自分の手で己のチンポを喜ばす事がヤメられない。  
初めてオナニーを覚えたのはまだ毛も生えていない頃。無意識に性器を弄ると  
いうものではなく、週刊誌のグラビアを見ながら嬉々としてチンポをシゴいて  
いるのを見た。あんな幼い頃から性に目覚める事にも驚いたが、射精時に大量の  
精液を噴出する事に驚愕した。この子、もう男になってる。女を孕ませる能力を  
持ってるんだわ。我が子のオナニーをさすがに当時は注意も出来ず、こっそりと  
その場を離れたのを記憶している。  
そして、あれから、何年も経つというのに、この子は飽きもせずチンポをシゴい  
て喜んでる。まるで楽しみがそれしか無い様に、チンポをシゴき続けているのだ。  
息子は、私に見られている事に驚く事も無く、むしろ嬉しそうな表情すら浮かべ  
ている。被っていたパンティを取ると、今度はその股布の部分を鼻に押し当てて、  
その汚れた部分をクンクンとこれ見よがしに嗅ぎ始めた。そして、チンポをシゴ  
く手を一層速く上下させた。生身の母親を見ながら、そのマンコの匂いが染み込  
んだパンティの匂いを嗅ぎながらのオナニー。そんな至福のオナニーを今、楽し  
んでいるのだ。息子は益々鼻息を荒くして、チンポをシゴき立てる。  
オナニー。息子のオナニー。私を見つめ、チンポを狂ったように高速でシゴき上  
げる。そして、息子は私に顎をクイッと上に向け合図をした。

「お前もオナニーしろよ」無言のサインに従う私。私は息子の頭を跨ぐように立  
ち、股を広げるとパンティ越しに股間を擦り、オナニーを始めた。別に欲情して  
いる訳でもない。こうすると息子が喜び、早く射精する事を反射的に知っている  
からである。セックスにしても、オナニーにしても、息子を喜ばせようとして応  
じた事は一度もない。全ては、一分一秒でも早く射精を終わらせ、この地獄から  
解放されたい一心からだ。私は、早く息子を興奮させようとパンティをずらすと  
オマンコを露わにし、割れ目を擦り上げたり、指をズボズボと激しく出し入れさ

せる。息子は興奮し、私をしゃがませ、マンコを舐めようとしてくるが、断固として応じない。足を突っ張り、立ったまま見せるだけだ。

そのままよ。絶対にしゃがまないからね。そのままチンポをしごきなさい。ダメよ！マンコ舐めさせる訳ないじゃないの。見るだけよ、ほら、早く出しなさい。出しなさいったら、ほらほら、早く出しなさい。チンポから汚い汁を吐き出すのよ。

抵抗ついでに、足でチンポを踏みつけてやった。その時だ。息子はビクビクと痙攣すると大量の精液で私の足の裏を汚したのだ。ヌルヌルとして生暖かい精液、ビクビクと痙攣する足、息子は嬉しそうに私の足で果ててしまった。精子の匂いが立っている私の所まで匂ってくる。臭い、とっても臭いわ。精子。

## リビング

私がリビングでテレビを見ながら寛いでいると、息子がそばに来て立ち尽くしている。

どうしたの？夜のサービスには早いでしょ？ドラマ見てるの。チンポのお汁を出すのは後にして。

私は息子を見るでなく、画面のドラマを見ながら話しかけた。

息子は息子で無言で立ったままだ。しびれを切らしたのは私の方だ。

横に立たれたままだとドラマに集中できない。

もう！判ったわよ。その代わり、今晚の手コキは無しだからね。

私は、ソファに乗って、手をつくると四つん這い状態になった。

息子は、無言で後ろに回り、私のパジャマをズリ下げる。

私はテレビに顔を向けたまま、挿入に応じる。

息子は例によって、コンドームを装着すると何の前戯も無しにチンポを挿入して来る。ドラマでは息子の推しであろう女優が男優と痴話げんかをしている。

こんなシーンでも欲情するのかと呆れながら見ていると、息子はテレビには一瞥もせず、私のマンコとチンポが繋がっている部分を凝視しながら腰を振っている。それもそうだ、他の女に興味でもあれば母親のマンコになんて、とっくに飽きている筈だ。あの女優と母さんと、どっちが好き？どっちとセックスしたい？そんな質問は愚問ね。この子にとって、私は単なる肉穴。肉の穴を持った人形にしか思っていないわ。いつでもどこでもオマンコさせてくれる肉奴隷にしか思われていない。テレビでは、痴話げんかの後のベッドシーン。

ふん、陳腐なシナリオ。テレビだからピストン運動は無し。こんな若い男と女が



ベッドで乳繰り合ってるだけで終わる筈ないじゃない。セックスだよ、セックス！男と女はベッドでこんなことするのよ。私は、自分で腰を振ってみた。快感が欲しかった訳ではない、何となく、テレビのシーンに嫉妬しただけなのだ。なのに息子は何を勘違いしたのか、私にしがみ付くと凄い勢いで腰を振って来たのだ。ハアハア、ハアハア、何興奮してんのよ。テレビなんだからHな事なんて始まんないわよ。何興奮してんの？あっ、痛い、痛いったら！母さんは興奮しないわよ。母さんが興奮する訳ないじゃないの。あん、乳首摘ままないで。乳首摘まんじゃ嫌！痛い、痛い！ヤメて！ヤメないとチンポ抜くわよ。息子は乳首を摘まむのを諦め、腰に手を回すと、私のお尻を抱えピストンを続ける。黙々と、ただ黙々と私にチンポを擦り付けている。彼にとって、私はただの肉の塊。チンポを擦る穴を持った肉人形に過ぎ無いのだ。息子はハアハアと息を荒くし、ピストンを速めると、前屈みになり、私にしがみ付いて来た。私にしがみ付いたら、そろそろ射精のタイミングだ。出そうとしている。精子を出そうと必死に腰を振っている。そんなに射精は気持ちいいのだろうか？快感なのか？母親を肉奴隷にしてまで得たい程のものなの？一段とピストンが早くなって来た。あっ、来た！射精だ。チンポから汁を出してる。あー出してる、間違いなく出してる。私のマンコの中で射精した。私にしがみ付いたまま、ガクガクと震えて果てた。ひとしきり痙攣して満足した息子は、果てた名残りの精液がたっぷりと溜まったコンドームを私の尻に乗せると、無言で部屋に戻って行った。私は私で、そのコンドームを結ぶとゴミ箱に投げ込み、何事もなかったように、パンティごとパジャマをずり上げてドラマを見続けた。

## エピローグ

今日もバックから突かれている。息子の性欲は底なしだ。昨夜の口内射精でたっぷりと精子を搾り取ったというのに、朝にはこうして、私にのしかかり腰を振って来るのだ。まるで何日間も射精を我慢させられたサルのように私にしがみ付き、狂ったように腰を振っている。私はいつもの様に、遠くを眺め、そのおぞましいピストン運動が終わるのを待っている。無言のまま、荒い吐息だけが響く部屋。私達はいつまでこんな事を続けるのだろう。ちょっと、そんなに激しくしないでよ。激しくしないでって言ってるでしょ？判るでしょ。濡れてない、濡れてないから痛いよ。痛い、オマンコが痛い。優しくして！優しくしてったら。パンパンと肉のぶつかる音が響く。その時、違う音が響いた！ひっ！何するの！ひっ！叩かないでうっ！うっ、ああん、叩いちゃダメ！

お尻ダメ！ひゃ！うっ！ハアハア、あん、あん、嫌、それ嫌、あん、あん、ヤメて！

チンポをマンコに差し込んだまま、お尻を強打する息子。普段、喘ぎ声一つ出さず、まったく反応を示さない母親が唯一、尻を叩かれる事に反応したのに喜んでいるのか、何度も何度も叩いて来る。

あん、あん、うん、うん、ダメダメよ、あん、ヤメなさい。ヤメなさいったら！あーん、ダメ！あーん、お一つ、お一つ、感じる感じる、あーダメ。

オマンコ、オマンコ感じる、あーん、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、ひっ、ひっ、あーオマンコオマンコ、ひいーっ、オマンコオマンコ。オマンコ気持ちいい、オマンコ気持ちいい、気持ちいいーっ。

何？いったい何なの？お尻を叩かれる度にマンコの奥が、子宮がビンビンと痺れて来る。あー気持ちいい、興奮する、これ凄く興奮する。

これ！これ、これ気持ちいい、凄く気持ちいいわ。

いいわこれ、いいわ、これもっとして。もっとぶって。ひいーっ、気持ちいい、マンコが、マンコが気持ちいいの。

してして、してして、オマンコ、オマンコ気持ちいいーっ！

なぜだか判らない。私の中の何かが弾けてしまった。

息子に尻を叩かれる。尻を叩かれる度に、電流が走るように痺れる。オマンコが痺れる。気持ちのいい痺れ、あん、この痺れが堪らない。私のマンコはダムが決壊したように淫水が溢れ出した。

ズボズボ、ズボズボと何年も聞いていなかった淫らな肉の擦れる音が聞こえて来る。

チンポ気持ちいい、母さんチンポ気持ちいい、あーチンポ好き好き、チンポ好き好き、チンポ大好き、チンポ大好き、もっとー、もっとー、もっとオマンコして一つ。狂ったように叫ぶ私。こんな事ってあるの？腰振りが止まらない。腰がブルブル震えて止まらないわ。あーイクッ、あーイキそう。私、マンコがイキそう。

あーイかせて。イかせて。

イキたい、イキたい。私イキたい。マンコいきたい、マンコいきたい。

アーイクイク、イクイク、オマンコいく、オマンコいく、イグイグ、イグイグ、あーマンコマンコマンコ、うーっマンコマンコマンコ、マンコいく、マンコいく、イグイグイグ、イグイグイグ、イグイグイグ、マンコマンコ、マンコがイグっ、マンコがイグッ、あああああああ、ああああああ、マンコがイクーっ

## エピローグのその後

その晩、私はオナニーをした。久しぶり。本当に何年振りのオナニーだろう。

息子との望まない淫らな関係を続けて以来、私は、本来楽しい筈のオナニーをまったくしなくなった。気持良くなる為のオナニー。快楽の為のオナニーは本当に久しぶりだ。これまで、息子のオナニーを助ける為に相互オナニーの真似事はしていても、気持ちいいと思った事は一度もない。ただ機械的にマンコを擦るだけで快感は皆無だった。

だか、今晚は違う。指でマンコを擦るだけで、腰がガクガクする程気持ちいい。オマンコが気持良くって堪らない。気持ちいい、気持ちいい、オマンコ気持ちいい。私は昼間の尻を叩かれるセックスを思い出し、夢中でオマンコを擦った。迂闊にも喜びの声を上げてしまった、チンポで突かれながら、尻を叩かれて喜んでしまった自分を思い出し、その興奮と快感を呼び戻すようにオナニーに耽った。あーダメだ。指じゃ足りない。チンポ、チンポ、チンポが欲しい。あーチンポ、チンポ。

私は下半身裸のまま、息子の部屋に走った。ドアを開けるとエロビデオを見ながらオナニーをしている。私はモニターのスイッチを切ると、息子に尻を向けて言った。

これからセックスするよ。母さん、したくてしたくて堪んないのよ。昼間みたいに、ここにチンポを差し込んで。マンコだよ。ほらほら、入れて入れて、昼間みたいにオマンコして。欲しいの。チンポが欲しいのよ。

ほらほら、セックスするのよ、セックス！してして、マンコして。

私はいつもの様に尻を突き出したまま、後ろから突かれるのを待った。

ほら、どうしたの？マンコだよ、マンコ。セックスしたくないの？

母さんがヤラせてあげるって言ってんのよ。

アンタがいつも入れたがるマンコだよ。ほら、両手でお尻広げてるから穴が丸見えでしょ？チンポを入れる穴よ。ほら、穴広げてる。ほらほら、ハメて。

ハメてったら。夜にセックスするのは久しぶりでしょ？

ほらほら、遠慮しないでハメてご覧。どうして来ないの？

息子が来ないのには理由があった。コンドームを探していたのだ。

ゴムなんて付けなくても。外に出せるでしょ？イキそうになったら、チンポ抜いてお尻に振り掛けたらいいの。判った？

ほらほら、チンポを入れて、入れてったら？

あー入って来た。チンポが入って来た。

あー気持ちいい、チンポ気持ちいい、チンポ気持ちいい。あーいいよ、もっと動いて。

あーいい、あーチンポいいわよ。あーチンポ気持ちいい。気持ちいいーっ。

あんなに嫌いだったセックス。昨日まで苦痛だったセックスが今日は堪らなく楽しい。息子のチンポが愛おしくなってる。



あー楽しいね。セックス楽しいね。お母さん、これ好き。好き好き。  
あーほら、いいわよ。昼間みたいにお尻ぶってもいいわよ。叩きたいでしょ？好きだったら、しなさい。

「一番したい事してもいい？」  
えっ?!

久しぶりに息子の声を聞いた。息子が私に話しかけたのだ。  
嬉しい。心の底から嬉しかった。  
今までに無い優しい扱いで私をベッドへ誘うと、仰向けに寝かせた。  
そして、ゆっくりと覆い被さって来たのだ。そして正常位、なんと正常位で挿入して来た。初めての正常位。これまで数え切れない程、セックスをして来たが、全てバックだった。獣のような交尾、愛情のかけらも感じさせない射精の為だけの交わり。私の体を道具を使う様に扱ってきたセックスばかりの息子が初めて正常位で抱いてくれたのだ。  
あー嬉しい、嬉しい。母さん幸せよ。あー気持ちいい、気持ちいい、オマンコが気持ちいい、今までセックスした中で一番気持ちいい。あーこんな風に抱き合ってセックス出来るなんて。あーいいわ、母さんとっても気持ちいい。あー、あー気持ちいい？気持ちいい？どうなの？聞かせて？声聞かせて。いいでしょ？声、聞かせてよ。耳元で言い聞かせていのに、無言で腰を振っている。まだ心を開き切っていないのかしら？そんな事ないわ。こんなに私をきつく抱きしめながら、腰を振っているんだもの。どうしちゃったの？  
腰に響く、ピストン運動の心地よい感触に痺れながらも、ふと、恐ろしい考えが頭をよぎった・・・。  
出そうとしてる。この子、私の中に精子を出そうと必死になってる。  
射精しようとしてるんだわ。あーダメ。何？どうする気なの？  
判った、やっとなんて判ったわ。この子、私に子種を付けようとしてる。妊娠させようとしてるんだわ。実の母親を孕ませようと毎日チンポを差し込んでいたのね。  
やっとなんて生でハメられた、このタイミングでオマンコ中出しを企んでる。  
復讐？それとも私と夫婦になりたかったのかしら。居なくなった父親のつもり？私は高速ピストンに突かれながら思い悩んでいた。  
秘密にしていた事がある。  
御免ね、御免ね。母さん、もう閉経しちゃってるの。貴方と何十年間もこんな事してる間に、閉経しちゃったの、御免。  
もう、何年も前から、生でセックスしても妊娠しない体なのよ。

閉経した母親のマンコ。もう妊娠する機能を失ったマンコ。  
息子はそれを知らずに腰を振り続ける。狂ったように腰を振り続ける  
私は、涙を流しながら息子が果てるのを待った